

特集・芸術文化の振興

文化と現代社会	林 雄二郎	2
<座談会>		
長期的観点に立った文化行政の課題		9
(出席者) 内村 直也・大島 清次・高瀬 喜左衛門 滝 淳・山本 和代・<司会>吉久 勝美		
全国高等学校総合文化祭の意義と課題	長谷川正明	28
大衆芸能の今昔	興津 要	37
<解説>		
国立国際美術館及び東京国立近代美術 館工芸館の開館	文化庁文化部文化普及課	45
各地方言収集緊急調査	文化庁文化部国語課	47
最近の著作権問題から	文化庁文化部著作権課	49

特集・我が国文教行政の現状

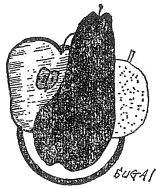
我が国文教行政の現状	木田 宏	51
図説 我が国文教の現状	岡本 昭	59

海部文部大臣のヨーロッパ出張概要報告	野口 昇	74
<海外教育ニュース>	大臣官房調査統計課	81
パリ圏の大学の入学制限を一部緩和(フランス)		
放送大学との単位互換制発足(イギリス)		
1981年までの高等教育拡充計画(西ドイツ)		
<文部省の窓>		
教科用図書検定規則、検定基準の改定	初等中等教育局教科書検定課	85
<連載第14回>		
人物を中心とした体育・スポーツ郷土史<山口県>	福井 脩治	87
霞が関ニュース		73

表紙・小林 敏子 カット 須貝夫早子

大衆芸能の今昔

——主として落語について——



興津要

国立演芸資料館(仮称)の設立が現実化したり、落語が中学の教科書に収載されたり、従来、不当に低級視されつづけてきた落語を中心とする寄席演芸が、ようやく正当な評価を受けるようになってきたことはうれしい。

寄席演芸が、不当な評価を受けてきた最大の原因は、テレビ普及以前においては、江戸時代以来、江戸、京都、大坂、それに名古屋をくわえた大都会偏重の極端な都会芸能で、全国性を持たないことにあった。

明治初期、各分野の芸能人が政府に招かれたさい、薩長出身の政府要人の前で、落語といただけでは理解されないの

で、三遊亭円朝が口演してみせたという伝説があるが、落語を中心とした寄席演芸の大都会偏重ぶりをそこに見る。問題を落語の今昔にしばってみると、それは、年一年と広い層の聴衆の獲得という命題にむかっただの苦闘の連続だった。

一

落語家の遠い先祖に、おじいちゃん御伽衆ごけしゅうがいた。

彼らは、戦国時代の武将の側近に侍し、はなしやその他の芸能によって武将の徒然つれづれをなくさめる役割を果たしたのだ

が、平和な江戸時代をむかえると、彼らの滑稽はなしは、折から創始された木版技術によって、『戯言養氣集』『醒睡笑』

ころに銭をあつめるといふ、すこぶる庶民的演芸で、笑話を毎日提供するこの街頭の芸術家は、笑話本になじみのないひとたちまでも動員した。

『きのふはけふの物語』などの笑話本となって刊行された。戦国武将たちに専有されていた笑話が、印刷物を通じて一般市民の手に渡ったわけで、笑話というあたらしい娯楽に胸おどらせる市民たちは、自作自演の会を持つようになり、ただ、はなしの筋だけしゃべるのでは、都会人と地方人の区別

これと平行して、市民の自作自演の笑話会も隆盛をきわめ、中国笑話本の翻訳や翻案という新要素も吸収して内容も豊富さをくわえていった。

がつかないから、身振り入りのハしかたはなしで演じた(万治二年刊『私可多咄』)という演出法のくふうもあり、笑話は、上流階級に奉仕する御伽衆の手から大衆の手にと解放されていった。

文化年間(一八〇四—一八一七)になると、江戸でも上方でも、常設の寄席が創始された。それは、天候に左右される、せまいヨシズ張り小屋の辻噺とは比較にならない安定した演芸場だったが、興行的には、辻噺以上に、多数の聴衆を、連日獲得することが必要になった。

こうなると、御伽衆が戦国武将に奉仕して生活の資をえたごとく、笑話によって一般市民に奉仕することを職業とする者が登場するにいたった。

江戸で寄席興行の推進力となった初代三笑亭可楽は、聴衆動員のためにアイデアの限りを尽くした。

それは、延宝年間(一六七三—一六八〇)から出現した辻噺の落語家で、京都の露の五郎兵衛、大坂の米沢彦八、江戸の鹿野武左衛門が有名だったが、ヨシズ張りの小屋をもうけ、演者は広床凡(ひろとこ)の上の机により、聴衆は床凡に腰をかける。晴天に興行して道ゆくひとの足をとどめ、噺が佳境にはいった

可楽自身は滑稽噺を得意にしたが、門下の朝寝坊夢楽には人情噺を、林家正蔵には怪談噺を、船遊亭扇橋には音曲噺を口演させ、それ以外に、都楽には写し絵(幻灯)を、可上には百眼(百面相の一種)をというように、噺以外の演芸である

ハ色物Vまで演じさせる幅広い演目を用意した。さらに、とんちに富む可楽は、聴衆から三つの題をもとめて即座に一席の噺にまとめる三題噺や、聴衆の出すなぞを巧妙に解くことでも人気をあつめた。とくに、なぞ解きは好評で、文化十二年正月二日初日の興行のさい、なぞ解きをやるというピラを出す、それまでは百人ぐらいだった客がにわか二三百人ほどになり、連日超満員だったというから、この余興は聴衆動員のキメ手になったわけだ。

可楽の努力によって、寄席に聴衆が定着していったのだが、幕末になると、より広い層の聴衆が寄席にあつまることとなった。

安政二年(一八五五)十月、江戸におこった大地震は、あたらしい聴衆を寄席に招きよせる結果をもたらした。というのは、復興景気で、手間賃が三匁から十三、四匁にはねあがったために、余裕のできた職人たちが、娯楽をもとめて寄席へくるようになったからだ。寺門静軒著『江戸繁昌記』(初篇天保三年、一八三二)によれば、天保時代の寄席の聴衆は田舎者、田舎侍、妾、隠居、番頭、手代などにかぎられていたというから、寄席のムードがかなり異なった色彩を帯びてきたことは否定できない。

寄席の様相を一変させるほど急増した職人という新聴衆層をキャッチするために、落語界では職人を謳歌する噺が多く口演されたが、また、深味のある話芸になじみのない彼らのために、歌舞伎ショーともいべき派手な芝居噺がさかんに上演された。とくに、天保の改革によって、江戸の中心部にあった歌舞伎小屋が、浅草観音裏手の猿若町という辺地に移されてからは、夜明けに開演して夕方に終演という時間的條件もからんで、歌舞伎は勤労階級に縁遠くなりつつあったので、芝居噺は歌舞伎にあこがれるひとびとの夢を満たしていた。なにしろ、芝居噺というものは、人情噺の途中で、鳴りものや声色がはいり、衣装は引きぬきで華やかになり、背景を見せ、ときには短刀のような小道具もつかうなど、演出がすべて歌舞伎調になるのだから歌舞伎の代役を果たしたことはまちがいない。

こういう時期に、芝居噺を華麗に演じ、いわゆる当時のミ―ハー族にまで最高の人気をえたのが、若き日の三遊亭円朝だった。

それは、ハ大都会のVというキャッチ・フレーズはあるにせよ、大衆のなかに落語を中心とする寄席演芸が根をおろしたこともあった。

それは、二代目柳家小さんが売れているところのエピソードだというから、明治二十年ごろのできごとだと思う。

小さんの看板が、神田の寄席「川竹」に出ているのを見た五人の書生が、江戸後期の人情本『小さん金五郎・仮名文章娘節用』のヒロインの美人芸者小さんを連想して入場したところ、チンに似たマンガ式美男の小さんが出てきたので、「なんだ、これが小さんか、美人かと思っただけでみたが、これは醜男もひど過ぎる」と憤慨して帰ったというが、このエピソードのなかに、明治になって寄席の聴衆の色彩を異にした様相があらわれていた。

それは、明治の新時代をむかえ、全国から東京にあつまってきた、寄席になじみのないあたらしい聴衆が生まれたことを意味していた。

この種の聴衆を対象にして出てきたのが、ステテコの円遊、ヘラヘラの万橋、釜掘りの談志、ラッパの円太郎と八寄席四天王と呼ばれた人気者だった。

円遊のステテコとは、それまでの落語家の踊りは坐り踊りだったのに、立ちあがって尻っぱしよりで半股ひきを見せ、

京にあつまってきたあたらしい聴衆の要求でもあった。とくに、新時代風俗をとりいれ、奇想天外のギャグによって古典を現代化し、新作も手がけて爆笑に徹した円遊は、近代落語史上の惑星であり、落語普及のための水先案内でもあった。

円遊の師匠円朝も、新時代にかんがみて、実録人情噺や、西洋ダネの翻案人情噺などの新分野を開拓し、とくに実録物の『塩原多助一代記』は、無一文の青年が、義理や忠孝をまもりつつ、勤労と節約の結果、一代で財を成すという、明治の新世代むきの内容ゆえに評判をあつめ、修身の教科書にもおさめられるほどだった。しかし、落語の聴衆の底辺を拡大したという点においては、やはり円遊の活躍によるところ大なるものがあった。

四

故五代目古今亭志ん生が、噺のマクラで、「うんと田舎へゆくてえと、落語なんてえものは、見たことも、きいたこともないひとがいる。ハナシカをカモシカとまちがえて、鉄砲を持ってかけこんで来たなんてえはなしもあるくらいであります」といつて笑わせていた。

むこう脛をつき出して、おかしな手つき、足踏みで踊ったのであり、万橋のヘラヘラとは、小噺のあとで、赤手ぬぐいで頬かぶりをして、肌ぬぎになって緋ぢりめんの長じゅばんを出し、赤地の扇子をかざしながら、「へらへらへったら、へらへらへ、はらはらはたら、はらはらは……」と、奇妙な唄を歌いながらの坐り踊りであり、談志は、落語のあとで、羽織をうしろ前にして、手ぬぐいでうしろはちまき、扇子を半びらきにして襟にさし、ざぶとんをふたつ折りにかかえると、あわれな声で「アジャラカモクレン、キューライー、テコヘン……」と、わけのわからない文句をとなえて、ざぶとんを置いて扇子をとると、鍬で釜を掘り出すしくさになって、中国の「二十四孝」の郭巨の釜掘りをまねたのであり、円太郎は、ガタ馬車の御者が持つラッパを吹いて登場し、いろいろの唄のあいだに、「納豆、納豆」「とうふい、なまあげ」と売り声をやったり、馬車の御者をまねて、「おばあさんあぶない！」とどなって旗を振り、ラッパを吹いたりした。

この四人は、伝統的な、江戸情緒ゆたかな人情噺中心の東京落語界において、反伝統的なナンセンスによる笑いをまきおこしたわけだが、それは、たしかに、新時代をむかえて東

これは、いささかオーバーな表現であるにもせよ、大正から昭和初期にいたっても、落語が、まだまだ全国に普及していなかった状態が、このことばのなかに表現されていた。

しかし、昭和にはいると、一年と落語普及のための道がひらかれていった。

というのは、ラジオとレコードの発達のためで、ラジオはNHK一局だったから、全国への影響力は強いとはいえなかったが、レコードのほうは相当な威力を発揮した。なかんずく、柳家金語楼の「兵隊」、先代三遊亭金馬の「居酒屋」などは、一世を風靡したものだだった。

それは、落語の速記本を読んだだけのひとたちにとって、実物を聴く魅力のすばらしさであり、迫力でもあった。

このようにして、落語の全国普及への道はしだいに開かれていったのだが、それが完全に軌道に乗ったのは、昭和二十六年にはじまる民間放送の開局以後だった。

とくにテレビの普及によって、落語は、はじめて全国に存在をしめすことになったのだが、まだ深い芸の味を鑑賞できないあたらしいファン層を開拓するために、「お笑いタッグ・マッチ」「末広珍芸シリーズ」「笑点」など、即席小噺やなぞ解きを中心とした、八大喜利Vと称する落語家の余興番

組がならぶこととなった。

この現象は、明治の東京における八寄席四天王Vの業績に通じるもので、つねに、より広い層のファンと直結してゆかねばならない大衆芸能の宿命の道すじでもある。

さらにまた、分秒をあらそうテレビにおいて、わかりやすい現代的小噺を、息を切らしてスピーディに口演することで成功した林家三平や、その手法を古典落語の世界に持ちこんで効果をあげつつある月の家田鏡などの姿勢も、落語を全国に普及させる点において貢献度は高い。

テレビによって、東京落語が全国性を持つ方向にむかうのと平行して、上方落語も、六代目笑福亭松鶴や桂米朝を中心に隆盛の道を歩みはじめたが、昭和初期以来、エンタツ・アチャコを先頭とする漫才に圧倒されつつけてきたことを思えば、その復興ぶりはめざましい。ただし、この場合も、たとえば桂米朝におけるごとく、全国で理解されうるような上方弁で口演するという、落語普及のための配慮がなされていることは注目に価する。

大衆芸能なるがゆえに、落語は、広い層のファンを持つこととのぞましいことはたしかなのだが、その点にのみ留意していると、芸の錬磨という側面が置き去りにされることになる。

「ないわね」と、不満をもらしあう女性グループがいたそうだが、この種のナンセンスをもとめるだけの聴衆と、研究会形式のホール落語会にあつまる落語通との落差はあまりにも大きい。

このギャップのなかで、落語をいかに生かすべきかという問題をめぐって、落語家たちはいずれも苦悩しているわけだ、つねにその時代の大衆と対決せねばならない人生きた芸術Vである落語の道はけわしい。

(参考) 国立演芸資料館の設立について

この興津先生の論文に示されているように、落語をはじめとする伝統的な大衆芸能は、古来寄席を中心として磨きあげられ、時代時代の大衆に親しまれてきたものであり、我が国の貴重な文化遺産として受け継がれて行くべきものである。

しかしながら、今日、正統的な芸の後継者が少なくなり、文献その他の貴重な資料も散逸しつつあるなど憂慮すべき状

つてくる。

落語の演出法は、浪曲のように、「だれがなにをして、なんとやら……」という叙述をもちいず、噺の登場人物の会話としぐさによって、聴衆の脳裏にイメージをよびおこすことにあるのだから、そのしぐさひとつにしてもおろそかにはできない。故八代目桂文楽が、自伝『あばらかべっそん』で、つぎのようにいっている。

「むらくのころの田馬師匠が、鱈昆布(たらこぶ)のおつゆを吸うところをおしえてくれましたが、たしかにほかのおつゆじゃない、こう鱈の骨をだす具合、昆布をたべて、またおつゆを吸う具合、ほんとに鱈昆布のおつゆを吸ってるようにみえるんです。羊かん一つたべるしぐさでも、どういう家の羊かんか、ちゃんとたべ分けてみせてくれるし、豆だつて、枝豆、そら豆、甘納豆、みんなたべ方がちがうんです。」

以上のような演出力を会得するために芸道精進をつづけるひとたちにとって、現代は悩み多き時代となっている。すなわち、テレビの大喜利番組によって八落語家Vの存在を知ったひとたちは、八落語Vの深い芸を鑑賞しようというところまで成長していない。過日も、上野鈴本演芸場の廊下で、落語家が多勢ならんでやる墨つけごっこ落語がなくてつまら

ただし、落語を全国に普及させようという努力が多少なりとも実をむすぶ方向にむかっていることもたしかで、全国各地に、ちいさいながらも鑑賞会組織が増えつつあり、真剣に八芸Vを味わう傾向が見られるということは朗報といえる。

戦国武将と御伽衆の専有物であった笑話が、幾多の段階を経て、全国各地の大衆のなかに浸透するにいたったということは、まことに今昔の感にたえない。

(早稲田大学教授)

文化庁文化部文化普及課

況にある。このため文化庁では、落語、講談、浪曲、漫才、いろいろの等の大衆芸能の優れた技芸、資料の継承、保存、公開を行う国立演芸資料館(仮称)を設置することとしている。

文化庁では昭和四十九年に演芸資料館設立準備調査会を設け、「演芸センターの設置について」の報告を受けた。昭和

五十一年度は国立劇場に隣接する建設用地を購入するとともに、基本設計を策定した。本年度はすでに実施設計の策定を完了し、この十一月に工事に着手したところであり、来年度は工事を完了し、開館する予定である。また、これと併行して資料収集を行っており、古書籍、SPレコード等の貴重な資料を多数収集している。

開館後は、資料の収集・保存、公開、後継者の養成、演芸の公開及び調査研究普及等の大衆芸能に関する事業を総合的に推進していく予定である。

——施設の概要——

設置場所 東京都千代田区隼町四番及び九番

(国立劇場敷地及びその隣接地)

建物規模

建築面積 一、〇一一平方メートル

延床面積 二、三六〇平方メートル

構造 鉄筋コンクリート造 地上四階地下一階

施設の主な内容

資料部門 三三七平方メートル 資料公開展示室、文献閲覧室、試写試聴室、文献資料室、物品資料室な

ど)

ホール部門 九六一平方メートル(舞台、ホール(客席数三〇〇席)、ロビー、楽屋、稽古場、会議室など)

管理部門 八四平方メートル(事務室など)
機械室・その他 九七八平方メートル



〔特集・私学の振興〕	
私学の振興	天城 勲
〔座談会〕	
私学の役割とその振興策	
〔出席者〕	村井 資長・堀越 克明・大石 脩而 河野 重男・八司会・鈴木 博司
私大十考	相馬 勝夫
私立高等学校の現状と課題	清水 辛
私立財政の現状と課題	市川 昭午
△解説△	
私学の発展の推移	管理局企画調整課
諸外国の私学制度	大臣官房調査統計課
△資料△	
私学関係資料	管理局私学振興課

◇「天災は忘れた頃にやってくる」とは寺田寅彦氏の言葉だが、忘れた頃にやってくるのは天災に限らない。社会の根本にかかわる問題も、一時的に興奮しても、あとは報道などでそんなこともあったかなと思いつくくらいで忘れてしまう。情報過多のこんにち、やむを得ないとも言えるが、こういう時代だからこそ息の長い、根気強い追究を大切にしなければなるまい。

◇「息の長い」といえば、團伊玖磨氏の『パイプのけむり』を思い出す。続続々、また……と現在八冊目だが、第一冊目からこれ十年以上になるだろう。転変激しい出版物の中にあっても貴重な存在といえる。

◇大仏次郎氏の『天皇の世紀』も息の長い作品といえる。維新の動乱をしつに精緻にそして悠々と描いており、読んでいるこちらの方がじれったくなったり根負けしてしまう。

◇本誌は大正九年に創刊されて以来五十年以上の歴史をもつが、たんに時間的な長さだけでなく、内容において、息の長いものになりたいと考える次第である。

ME J	5206	月刊	「文部時報」 11月号	第1206号
------	------	----	-------------	--------

著作権
所有

発行所
株式会社ぎょうせい

本社
東京都中央区銀座7丁目4番12号
(郵便番号 104)

(営業所)
東京都新宿区西五軒町52番地
(郵便番号 162)

電話
東京 (268) 2141 (代表)
振替口座 東京 9-161番

印刷所
株式会社 行政学会印刷所

昭和52年11月5日 印刷
昭和52年11月10日 発行

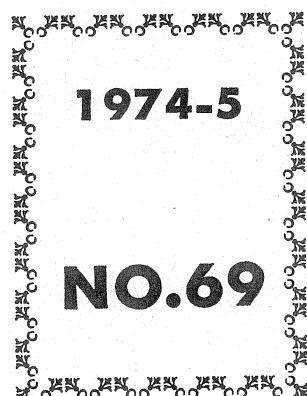
定価 180円 (千33円)

年間購読料 2160円 (千円)

* ただし、増大号、臨時号の場合は別に代金を申し受けます

* なお、購読の申し込みは、直接営業所またはもよりの書店をお願いします

文化庁月報



も く じ

春の勲章受章者受杯者きまる……………	2
日本芸術院賞決まる……………	3
昭和49年度 文化振興会議の開催地・日程等決まる……	4
昭和49年度 青少年芸術劇場開催計画きまる……………	4
演芸資料館設立準備調査会発足……………	6
随 想 吉久勝美……………	6
図書館等職員 著作権実務講習会の開催要綱……………	7
衛星送信信号保護条約について……………	7
著作権シリーズ (30) —著作権仲介業務—……………	8
昭和49年度 「文化財愛護モデル地区」を指定……………	9
欧州巡回日本伝統工芸展の開催……………	9
第 20 次 重要無文化財保持者認定書交付式……………	10
東京国立博物館・奈良国立文化財研究所 および国立国語研究所の機構改組……………	10
国立国際美術館（仮称）の設立準備……………	10
文化庁防災業務計画……………	11
人事異動……………	10

演芸資料館設立準備調査会発足

落語、講談、浪曲、漫才、いろいろもの等の大衆芸能のための演芸資料館の設立について検討するため、文化庁長官の諮問機関として設置された演芸資料館設立準備調査会（会長・南部圭之助氏）は、去る四月九日、第一回目の会合を開いた。

我が国独自の伝統的な大衆芸能の優れた技芸は、我が国の優れた文化的財産の一つとして受け継がれていくべきものであるが、今日、これらの大衆芸能の多くは貴重な資料の散逸、正統的な芸の後継者の減少等が目立つ状態にある。

特に、各種文献をはじめ貴重な芸能資料が年とともに散逸、滅失しつつあり、また広く活用されていない場合も多いので、これらの資料の散逸、滅失を防ぐための措置として資料の収集を早急に行うとともに、大衆芸能の優れた技芸の保存・振興等のための演芸資料館（仮称）の設立について検討する必要がある。

演芸資料館設立準備調査会は、本年二月に発足した芸術文化専門調査会（大衆芸能部門）を発展させたものであり、

緊急に収集する必要がある寄席芸能を中心とする大衆芸能関係資料、演芸資料館（仮称）の行う調査研究、後継者の養成事業等について、具体的に検討を進めることとしている。

委員は次のとおり（敬称略）。

有竹修二（評論家）、池田弥三郎（慶大教授）、榎本滋民（劇作家）、興津要（早大教授）、小島貞二（演芸評論家）、小菅一夫（作家）、坂本朝一（NHK放送総局長）、高橋博（評論家）、玉川一郎（作家）、南部圭之助（評論家）、旗一兵（同）、坊城俊周（フジポニー社長）、アダチ竜光（奇術実演家）、東家浦太郎（浪曲実演家）、古今亭今輔（落語家）、春風亭柳昇（同）、宝井馬琴（講談実演家）、柳家小さん（落語家）、柳家つばめ（同）、リーガル天才（漫才実演家）。